

複言語家庭における継承語としての日本語の使用と言語社会化 —シンガポール在住の親子の会話を事例として—

乾友紀（大阪大学大学院生）

1. プロジェクトの背景

人がある言語を習得するとき、相手や状況に合ったことばを身につけていくとともに、その言語を使用する社会の文化や価値観も学んでいく。このように言語を通して社会化することを言語社会化（language socialization, Ochs & Schieffelin, 1984）という。日本国内の日本語における言語社会化の研究が蓄積されている一方で、日本国外に在住する日本語を使用する家庭について、言語社会化の観点からなされた研究は Takei & Burdelski, 2018 など、わずかである。

グローバル化の進む社会で、継承語としての日本語教育がなされている家庭で日本語・日本文化がどのように使用され、伝えられているのかについて理解を深めることには意義がある。複言語環境で育つ子どもが、継承語としての日本語及び文化を継承するためには、家庭内での養育者の支援と継続が必須であるとされる（磯崎・内海, 2024）。

そこで、本活動では、シンガポール在住の親子の会話データの分析及びインタビュー調査により、日本語教育がどのようになされているのか、また、文化的要素がどのように伝えられ、子どもが理解をしているのかについて探る。

シンガポールの公用語は、英語、中国語、マレー語であり、駅の案内や標識など町の中でこれらの言語が使用されているのがわかる（図1）。日本語による案内表示などはほぼ見られないが、日本食レストランなどは多く、日本語は町のあちこちで目にする（図2）。

また、言語教育について、ローカル校では、公用語としての英語を学び、中国語、マレー語、タミル語を中華系、マレー系、インド系の子どもがそれぞれ学習する（江田, 2012）。その場合、日本語については、家庭内学習、もしくは週末の継承語学校で学ぶこととなる。



図1 駅ホーム



図2 日本食レストラン

2. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、シンガポール在住の日本語を母語とする養育者と子どもの会話において、どのように日本語が使用されているのか、また、言語を通してどのような規範や価値観が伝えられ、子どもはどのように理解しているのかを明らかにすることである。

3. プロジェクトの概要

3-1. プロジェクト全体のスケジュール

本プロジェクトは、以下の流れで実施した。渡航前に、日本語を母語とする養育者（母親）4名に対してzoomによりインタビュー調査を行った。また、現地で養育者-子ども間の会話データを収集し、渡航後、データの分析・考察を行った。

表1 活動全体のスケジュール

月	活動内容
7月	先行研究のまとめ インタビュー（zoom）
8月	1-6日：シンガポール渡航 会話データ収集 会話データの文字起こし
9-1月	データ分析・考察 報告書作成

3-2. 協力者及びデータ情報

協力者は、国際結婚家庭3組（家庭1-3）、日本人夫婦家庭1組（家庭4）である。家庭1の父親はシンガポール人であるが、日本留学経験があり、家庭内で日本語を使用することもある。また、家庭4は両親ともに日本語母語話者であるが、データ収集に参加したのは母親のみである。以下に、協力者の情報を示す。

表2 協力者情報

家庭	養育者	子どもの年齢/学校
家庭1	父・母	兄：10歳/現地校 弟：8歳/現地校
家庭2	母	8歳/現地校
家庭3	母	11歳/現地校
家庭4	母	姉：11歳/日本人学校 弟：9歳/日本人学校

3-3. インタビュー調査及び会話データ収集

日本語母語話者である母親に対して、zoomにて半構造的インタビューを行った。質問項目は、① 家庭内及び家庭外（祖父母との会話、学校、町など）での言語使用状況、② 養育者から見た子どもの言語能力、③ 養育者の言語教育観、④ 家庭内で日本の文化や習慣を教えているか、の4点である。

渡航期間は、2025年8月1日から同年8月6日までであり、この期間に養育者-子ども間の会話をビデオカメラで撮影し、各家庭1時間（計4時間）データ収集を行った。

4. プロジェクトを通して得られた成果

本活動を通して得られた成果についてまとめる。まず、インタビュー調査からは、いずれの家庭においても、養育者が子どもに日本語・英語力共に伸ばしてほしいと望んでいるということが共通して見出された。次に、どの家庭でも、家庭内で日本の文化やマナーが伝えられている（「いただきます」と言う、雛人形を飾るなど）ということがわかった。また、家庭1-3では、母親とは日本語、父親とは英語で話す、家

庭4では両親ともに日本語で話すという方針で育児がなされている。

次に、会話データから得られた成果についてまとめる。養育者は、子どもが日本語を使用する上で生じたトラブルに対して援助をすることによって、子どもの日本語の習得を促していることが観察された。また、子どもが経験していない日本の活動について説明したり、遊んだり（てるてる坊主作りやかくれんぼなど）することを通して日本の文化についても教えていることが明らかになった。一方、子どもは母からの説明を受け入れるのではなく、自分なりの理解を示したり、反論をしたりすることで主体的に活動に参加していることがわかった。



図3 子どもが宿題の質問をしている（家庭4）

また、会話の中で子どもが時折英語を使用することが見られたが、母親はその都度日本語での言い換えをしていることが観察された。これは、日本語の使用・習得を促すと同時に家庭内における言語使用の規範を示すものと考えられる。



図4 将棋をする兄弟を見る母（家庭1）

5. 今後に向けて

以上、本プロジェクトの概要及び得られた成果について報告した。本活動で得られた知見は、継承語としての日本語教育や言語社会化に対する理解を深めるものである。しかしながら、データが限定的であり、今後も継続したデータ収集が必要であると考えられる。

参考文献

- (1)磯崎みどり・内海朋子 (2024) 「継承語とアイデンティティの形成-シンガポール在住の日本語継承語話者の事例を通して-」 杉野俊子(監修) 田中富士美・柿原武史・野沢恵美子 (編) 『言語教育のマルチダイナミクス』 明石書店 pp.16-28.
- (2)江田優子ベギー (2012) 「言語の経済性-英語に生き残りを賭けるシンガポール-」 松原好次・山本忠行 (編) 『言語と貧困-負の連鎖の中で生きる世界の言語的マイノリティ-』 明石書店 pp.121-137.
- (3) Ochs, E. & Schieffelin, B. B. (1984). Language acquisition and socialization: Three developmental stories and their implications *Culture theory: essays on mind, self, and emotion*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.277-320.
- (4) Takei, N. & Burdelski, M. (2018). Shifting of “expert” and “novice” roles between/within two languages: Socialization, identity, and epistemics in family dinnertime conversations. *Multilingua: Journal of Cross-Cultural and Interlanguage Communication*, 37(1), 83-117.